



まず、レンゴーがどのような会社かご紹介します。当社の創業者である井上貞治郎翁が1909年に日本で初めて段ボール事業を興しました。



< レンゴー株式会社 概要 >

|      |                           |   |
|------|---------------------------|---|
| 本 社  | 大阪市北区中之島2-2-7 中之島セントラルタワー |    |
| 東京本社 | 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス   |   |
| 創 業  | 1909(明治42)年 4月 12日        |    |
| 設 立  | 1920(大正 9)年 5月 2日         |   |
| 資本金  | 310億66百万円 (2018年3月31日現在)  |   |
| 売上高  | 連結 6,057億12百万円 (2018年3月期) |   |
| 従業員数 | 連結 16,532名 (2018年3月31日現在) |   |

創業は1909年、設立は1920年です。資本金は310億円、連結売上高は6,057億円ですが、連結消去前の売上高はおよそ6,500億円です。



< GPIレンゴー ～ 6つのコア事業 ～ >

**The General Packaging Industry**

**[製紙]** 段ボール原紙、白板紙等



グループネットワーク

研究・技術開発部門

段ボール

製紙 紙器

重包装 軟包装

海外

包装機械/包装周辺分野

**[段ボール]** 各種段ボール製品



**[紙器]** 一般紙器、マルチパック等



**[重包装]** ポリエチレン巻袋、フレキシブルコンテナバッグ等

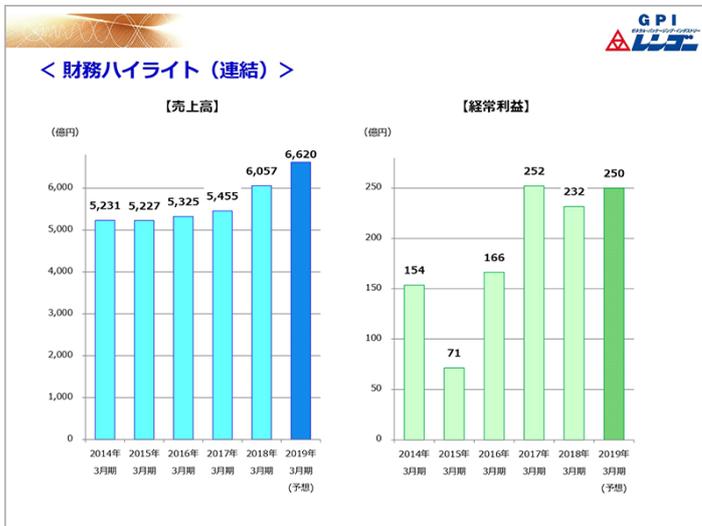


**[軟包装]** フィルム包装、ラベル等



当社グループがどのような事業をやっているかご説明します。当社グループには、コアになる事業が6つあります。それは、製紙、段ボール、紙器、軟包装、重包装、海外の6事業です。これを六角形に見立てて、「ヘキサゴン経営」と呼んでいます。このなかで皆さんに毎日使っていただいているのは、コンビニなどで売っているおにぎりのパッケージ（軟包装）ではないでしょうか。

当社グループの主力製品は段ボールです。最近ではEコマースが大変発展していますが、皆さんがインターネットで注文した物が配達される際には、必ず段ボールに入っていると思います。その段ボールの日本での生産量の30%はレンゴーが作っているのです。



2019年3月期のレンゴグループの売上高（予想）は約6,600億円です。これは連結消去後の売上高ですが、2,000億円ほどの連結消去がありますので、レンゴグループの事業規模は約9,000億円ということになります。

**GPI**  
**LENOR**

### ＜沿革＞

|             |   |
|-------------|---|
| 1909(明治42)年 | 井上貞治郎が三盛舎の名称で我が国初の段ボール事業を創始（段の付いたボール紙を「段ボール」と名付けた。） |
| 1920(大正 9)年 | 聯合紙器株式会社を設立   |
| 1972(昭和47)年 | 社名を「レンゴ株式会社」に変更                                     |
| 1976(昭和51)年 | 福井化学工業を系列化  |
| 1990(平成 2)年 | マレーシアで段ボール合弁事業に資本参加し、海外事業に進出                        |
| 1998(平成10)年 | 朋和産業の株式を取得し完全子会社化、軟包装事業に進出                          |
| 1999(平成11)年 | セッツを合併、資・量ともに 製紙・段ボールの一貫メーカーへ                       |
| 2009(平成21)年 | 創業100周年 / 日本マタイの株式を取得し子会社化、重包装事業に進出                 |
| 2011(平成23)年 | 米国ハワイ州にレンゴ・パッケージング社を設立                              |
| 2016(平成28)年 | トライウォール社を子会社化                                       |
| 2019(平成31)年 | 創業110周年 “Vision 1 1 0”                              |

1909年に井上貞治郎翁が会社を興した後、1972年に漢字の「聯合紙器」からカタカナの「レンゴ」に社名変更しました。私は2000年にレンゴの社長に就き、今年で19年目になります。東証一部上場会社で19年間も社長を続けているのは、日本ではキヤノンの御手洗会長、信越化学工業の金川会長、ダイキン工業の井上会長と私くらいではないでしょうか。

**GPI**  
**LENOR**

### ＜レンゴグループ 環境経営のキーワード＞

**“ Less is more.”**  
レンゴが考えるパッケージング・イノベーションの基本

**“ Less energy consumption ”**  
エネルギーの消費はできるだけ少なく

**“ Less carbon emissions ”**  
二酸化炭素の発生はできるだけ少なく

**“ High quality products with more value added ”**  
より付加価値の高い高品質な製品づくり

レンゴーのコーポレートステートメントは「Less is more.」です。何を目的としているかと言うと、“Less energy consumption（エネルギーの消費はできるだけ少なく）”、“Less carbon emissions（二酸化炭素の発生はできるだけ少なく）”、それでいて“High quality products with more value-added（より付加価値の高い高品質な製品づくり）”という狙いがあるのです。環境に配慮した企業経営に取り組んでいます。



例えば、段ボールの種類はたくさんありますが、できるだけ薄く、できるだけ軽く、なおかつできるだけ二酸化炭素を発生させないような作り方をしていくということです。

段ボールの原料となる紙を段ボール原紙と呼びますが、これもできるだけ薄く、それでいて強度は出るように考慮したLCC原紙（Less caliper & carbon containerboard）という製品を作っています。

他にも、レンゴー スマート・ディスプレイ・パッケージングやラクッパ ディスプレイといった、店頭でさっと組み立てることができる製品も作っており、働き方改革にも貢献しています。



エネルギー消費をできるだけ少なくするということにも取り組んでいます。電力を生み出す方法には、火力、原子力、水力などがありますが、当社グループでは太陽光発電を本格的に採用しています。

それから、原油の代わりにバイオマス燃料を使ってガスタービンを回すといった方法も採用しており、これらをひっくるめて「軽薄炭少」と呼んでいます。一般的には「短小」という字を使いますが、炭素の発生を少なくするという考え（Less carbon emission）で「炭少」という字を使用しています。このスローガンのもと、各工場ですさまざまな取組みを進めています。



< 2025年 国際博覧会 >

2025年 国際博覧会の  
大阪・関西 での開催決定！

**EXPO  
2025**  
OSAKA, KANSAI, JAPAN

テーマ : いのち輝く未来社会のデザイン  
" Design Future Society for Our Lives "

開催期間 : 2025年5月3日(土)~11月3日(月) 185日間  
開催場所 : 大阪 夢洲 (ゆめしま)  
想定来場者数: 約2,800万人  
経済波及効果: 約2兆円 (試算値)

私は関西経済連合会の副会長でもありますが、万国博覧会を大阪の夢洲に誘致することを目指してずっと取り組んできました。2018年11月23日、パリで行われたB I E（博覧会国際事務局：Bureau International des Expositions）総会でのロシアとの最終決戦で日本への誘致が決定したわけですが、誘致決定までの過程では、さまざまなことに尽力してきました。

1970年に大阪万博が開催されましたが、皆さんのご両親が生まれたか生まれていないかの頃でしょう。今でも岡本太郎氏の「太陽の塔」が残っているのはご存じだと思いますが、今度はその万博を夢洲に再現しようとしています。舞洲、夢洲、咲洲は、大阪港の北港と南港に作られた人工島です。2008年夏季オリンピックの大阪での開催を目指し誘致活動が行われ、その会場として舞洲が検討されていましたが結局は誘致に失敗し、3つの人工島を活用できていませんでした。

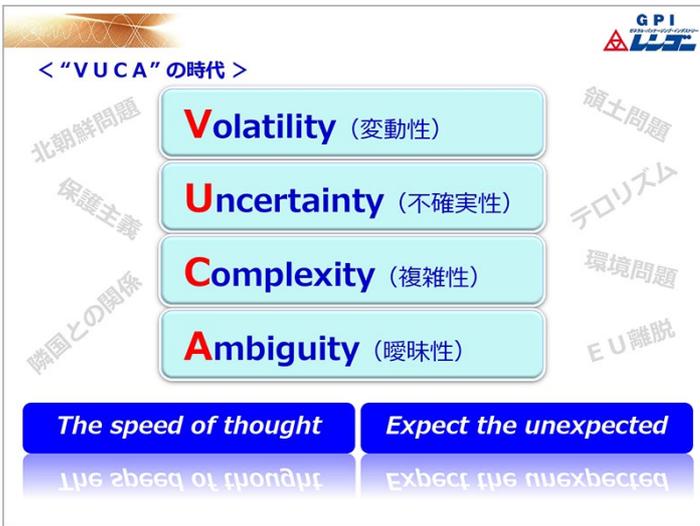
今回、これらの人工島を本格的に活用できるひとつの材料に、万博の誘致が決定しました。万博誘致活動においては、大阪府・大阪市・日本政府が表に立つ形となっていました。実際はわれわれ関西財界がさまざまな面で尽力した結果が万博誘致につながったのです。2025年大阪・関西万博のメインテーマは“Designing Future Society for Our Lives”（いのち輝く未来社会のデザイン）ですが、これはSDGsの趣旨を汲んでいます。SDGsとは、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）です。持続可能な17のゴールと169のターゲットから構成されており、その全てが、人間生活を営むにあたって、地球規模で本当に良い社会にしていくための指針となっています。



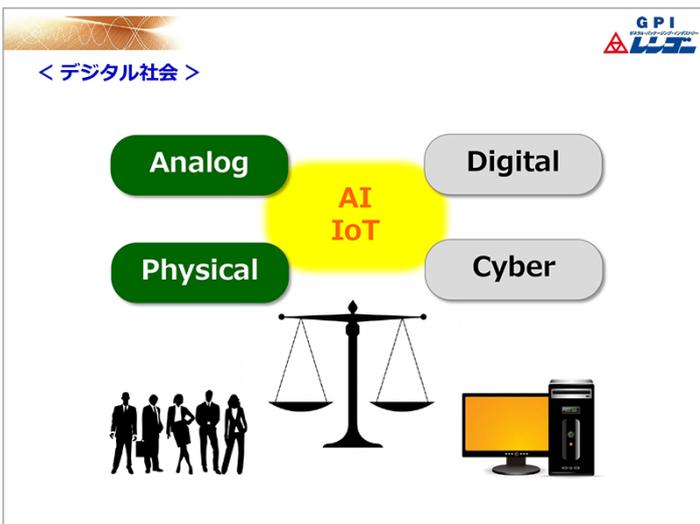
2000年に国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言をもとにまとめられた、開発分野における国際社会共通の目標であるミレニアム開発目標 (MDGs : Millennium Development Goals) では、極度の貧困と飢餓の撲滅など2015年までに達成すべき8つの目標を掲げ、一定の成果を上げました。SDGsは、そのMDGsを引き継ぎ、2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2030年までの国際目標です。世界の150を超える国々が参加し、SDGsで掲げた目標の実現に向けて取組みを進めています。それにはやはり経済界が中心的役割を担わなければなりません。日本では、日本経済団体連合会 (経団連) と関西経済連合会 (関経連) が中心になって推進しています。

SDGsについては、JICA (国際協力機構) も対外的に動いています。JICAと関西経済界が一つになってSDGsをさらに発展させていこうとしています。2025年万国博覧会は、ロシアのエカテリンブルク、アゼルバイジャンのバクー、そして日本の大阪・夢洲での候補地争いとなりました。ロシアが優勢ではないかという空気も流れていましたが、われわれや多くの方々の努力で逆転することができました。

その一つの大きな要因が神戸大学だったと思います。皆さんもご存じだと思いますが、iPS細胞の研究・開発でノーベル賞を受賞された山中伸弥先生は4年間神戸大学の医学部で勉強され、卒業後に京都大学に移られました。山中先生が神戸大学で一番お世話になったのは、柔道とラグビーをともにプレーした法学部、経済学部、経営学部の三学部の方々だそうです。私は凌霜会の理事長でもありますが、山中先生にBIEでプレゼンテーションをしてほしいとお願いしました。山中先生には2回プレゼンテーションしていただきましたが、そのことが誘致に大きく貢献したと考えています。



今、世界は“VUCA”の時代にあります。Vは“Volatility（変動性）”、Uは“Uncertainty（不確実性）”、Cは“Complexity（複雑性）”、Aは“Ambiguity（曖昧性）”、この頭文字をとって“VUCA”の時代と言っています。“Volatile”とは、マッチで火をつけると爆発してしまうような状態のことです。例えばアメリカと中国との関係、あるいは北朝鮮との関係、イギリスとEUとの関係など、非常に“Volatile”な関係であるといえます。また世界は“Uncertainty（不確実性）”にあふれており、複雑かつ曖昧な状態が続いているということです。そのような時代にあって、“The speed of thought”“Expect the unexpected”でなければならない、ということです。



今、皆さんにいろいろなことを質問すると、おそらくスマートフォンですぐに調べる、ということが多いのではないのでしょうか。何でもサイバーに頼ってしまう、という状況になっています。AIやIoTやロボティクスやビッグデータといった言葉が飛び交い、AIの時代に入っている、これはこれで良いのですが、サイバーに支配されるのではなく、人間がサイバーを使い切るという状態でないと、本当の人間関係がおかしくなってしまいます。サイバーとフィジカルのバランスが取れたシステムをつくり上げなくてはならないということで、CPS（Cyber-Physical System）という言葉を経済界に発信しています。サイバーに支配されすぎでは困るのです。

アナログとデジタルの違いは何でしょうか。0から9までの連続した数字を使って処理していくことがアナログであり、0と1だけで処理していくのがデジタルです。アナログの良いところを残さないで、人間社会はおかしくなります。皆さんもスマートフォンに頼りすぎるのではなく、まず自分で考え、スマートフォンで調べるのはそのあと、ということにしなければなりません。考える前にスマートフォン、デジタルに頼ってしまうということが“VUCA”

A”の時代になってしまった一因ではないでしょうか。



福沢諭吉の『学問のすゝめ』では「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という一節が有名ですが、読み書きそろばんが重要であるとも言っています。読み書き (literacy) 、そろばん (numeracy) を自分でできないといけなわけです。これらを忘れてしまっても、人間社会はおかしくなってしまいます。

先日数学者である藤原正彦先生といろいろ話をしたときに、藤原先生はご存じのとおりアメリカやイギリスで長年教えられて、ハーバードやオックスフォードでも教鞭を執っておられた先生ですけれども、このような話をされていました。

「 $1/2 + 1/3$ はいくらかと質問をしたところ、生徒が $2/5$ と答えたのです。アメリカやイギリスでは、このような生徒が多いのですよ」

分母は分母で足し、分子は分子で足して $1/2 + 1/3 = 2/5$ と答えてしまう。これほど頭で考えることが退化しているということです。これも、サイバーに支配されているという状態なのです。

同じようにジョーク的な話ですが、イギリスのある馬主が、自分も年だから財産である17頭の馬を三人の子供に譲ることにしました。長男には $1/2$ 、次男には $1/3$ 、三男はまだ小さいので $1/9$ 、としました。ところが3人で相談しても、17頭がどうしても割り切れない。馬を切って分けるわけにもいかない。たまたまそれを聞いていた隣の人が「それでは私の1頭を持ってきてあげましょう。18頭にして3人で分けなさい。」と言いました。そうすると長男は18頭の $1/2$ なので9頭。次男は $1/3$ なので6頭。三男は $1/9$ だから2頭。9頭と6頭と2頭、全部足すと17頭です。余った1頭は隣の人が連れて帰りました。これは一体どういうことでしょうか。どんな仕掛けになっているのでしょうか。何も考えないままスマートフォンに頼ってはいけません。

私は本を読むのが大好きで、日ごろいろいろな本を読んでいます。夏目漱石の門下である内田百閒のユーモア小説について私が紹介した日本経済新聞の記事を紹介します。

バランスシートと損益計算書、キャッシュフローについて皆さんは本当にわかっていますでしょうか。

“「企業人としてモノの見方が分かっているか、それを試す格好の本がある」そう言って大坪が最初に取り出してきたのは、アダム・スミスでもジャック・ウェルチでもない、内田百閒の『第一阿房列車』だった。夏目漱石の門下でユ

—モア文学の流れを受け継ぐ百間の代表作の一つである。弟子とともに「用がない旅」に出て珍道中を繰り広げる物語だ。

大坪がぜひ読んでほしいというのが、東京と大阪を往復する『特別阿房列車』の中の一節。

弟子のヒマラヤ山系が、百間先生にこんな話をする。”



皆さんがバランスシートと損益計算書、キャッシュフローのことが分かっているかどうか、ここからの部分です。

“「三人で宿屋へ泊りましてね（中略）払いが三十円だったのです。それでみんなが十円ずつ出して、つけに添えて帳場にもって行かせたら（中略）五円まけてくれたのです。それを女中が三人の所へ持って帰る途中で、その中を二円胡麻化しましてね。三円だけ返してきました（中略）その三円を三人で分けたから、一人一円ずつ払い戻しがあったのです。十円出した所へ一円戻って来たから、一人分の負担は九円です」

「それがどうした」

「九円ずつ三人出したから三九、二十七円に女中が二円棒先を切ったのでめて二十九円、一円足りないじゃありませんか」 ”

バランスシート、損益計算書、キャッシュフローについて、皆さんの中にはすでに勉強している方もいると思いますが、どこがどう間違っているかわかりましたか？わかっているようでわかっていないため、錯覚が起こります。皆さんも、この答えについて考えてください。

皆さんが勉強する時、進んだものを勉強しようとしていると思いますが、まず基本原則をきちんと学ばないと、本当のことはわかりません。

京都大学の山中伸弥先生やノーベル賞を取られた本庶佑先生も、基礎科学がしっかりしていないと、科学技術の進歩は無くなってしまふ、ということを仰っています。

本庶先生も山中先生も、基礎科学をしっかりと勉強されてノーベル賞を取っておられます。基礎科学をおろそかにして応用化学ばかりを研究しては進歩はない、ということです。

皆さんも、これからゼミやシニアに行かれた時に、最先端のことを研究されると思いますが、例えば経済原論を知らなければ経済学全体を理解することはできません。基礎知識をぜひマスターしてください。

GPI  
GRIFFIN PARTNERSHIP COLLEGE

< 学生の皆さんに取り組んでいただきたいこと >

『温故知新』  
～ 故きを温ねて新しきを知る (論語 為政篇)

“Where we are going, back to the future?”  
“No, already been there.  
Your future is whatever you make.”  
～ あなたの将来は自分がつくるものだ (映画: Back to the Future)

『自我作古』  
～ 我より古を作す (宋史)

過去 (歴史) → 現在 (今の自分) → 未来 (ありたい姿)

私はスピルバーグ監督の『Back to the Future』という映画が非常に好きで、劇中に出てくる“Where we are going, back to the future?”“No, already been there. Your future is whatever you make.”というセリフがあるのですが、これはなかなかいい言葉ですので覚えておいていただくといいと思います。

GPI  
GRIFFIN PARTNERSHIP COLLEGE

< 学生の皆さんに取り組んでいただきたいこと >

福沢諭吉『学問のすゝめ』

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。

広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。

その次第はなはだ明らかなり。『実語教』に、「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとによりてできるものなり。

学問とは、ただむずかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。

されば今、かかる実なき学問はまず次にし、もっぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。 (一部中略)

⇒ 『読み書き (literacy)』『そろばん (numeracy)』の重要性



福沢諭吉の『学問のすゝめ』、これは先ほども申しあげましたが、読み書き (literacy)、そろばん (numeracy) が非常に重要だということです。それを蔑にして、テレビやスマートフォンに頼ってしまうと、本当の意味での「自分で考える力」がだんだん退化してしまいます。

A I (artificial intelligence) は人工「知能」であり「頭脳」ではありません。皆さんは自分の頭脳 (brain) を使って判断していかなければいけません。人間が作り出した人工的な「知能」にばかり頼ってしまうのではなく、自分で考えるということをぜひ実行していただきたいと思っています。





< 学生の皆さんに取り組んでいただきたいこと >

**夏目漱石『草枕』**

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。  
意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。  
どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。  
やはり向う三軒両隣にちらちらするただの人である。  
ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。  
あれば人でなしの国へ行くばかりだ。  
人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

⇒ ビジネスとは『 Art 』&『 Science 』である



「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」  
これは、夏目漱石の『草枕』の中の、非常に有名な一節です。これを「知情意」と覚えておいてください。  
皆さんが人生を送るにあたって、求めていかなければならないのは、キリスト教的な言葉になるかもしれませんが、「真善美」です。人間は「真善美」を求めて、人間社会をつくり出しています。その過程には「信望愛」がありません。「信じ難きを信じ、望み難きを望み、愛し難きを愛す」ということです。皆さんの生活の基本は「信望愛」です。「信望愛」を行いながら「真善美」を求めているということなのです。



< 学生の皆さんに取り組んでいただきたいこと >

**アダム・スミス『国富論』**  
“ An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations ”

“ division of labor ” 分業論  
“ an invisible hand ” 見えざる手

**アダム・スミス『道徳感情論』**  
“ The Theory of Moral Sentiments ”

“ sympathy ” 惻隠の情  
“ sentiments ” 感情  
“ morality ” 道徳  
“ ethics ” 倫理  
“ philosophy ” 哲学



アダム・スミスの『国富論 (An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations) 』に出てくる「分業論 (division of labor) 」、「見えざる手 (an invisible hand) 」は経済学において重要な言葉ですが、『国富論』の前に発表した『道徳感情論 (The Theory of Moral Sentiments) 』の中にも、非常にいい言葉が出てきます。

|              |      |
|--------------|------|
| “sympathy”   | 惻隠の情 |
| “sentiments” | 感情   |
| “morality”   | 道徳   |
| “ethics”     | 倫理   |
| “philosophy” | 哲学   |

『道徳感情論』で彼が強調しているのはこの5つです。

『国富論』は経済学の原点であり、そのあと多くの経済学者によって経済学が発展していきますが、『国富論』は一切数式を使わずに経済学を展開しており、皆さんにも非常に読みやすいと思います。



< 学生の皆さんに贈る言葉 >

- 『自律』と『自立』  
自らを律し、自ら立つこと
- 『3つのS』  
Simple (物事は簡単に考えること)  
Speed (物事を進めるにはスピードが重要)  
Self-Confidence (自立+自律、自分自身に自信を持つ)
- 『強い頭』  
“賢い頭”よりも“強い頭”を持つこと  
“強い頭”と“3つのS”を備えること ⇒ “矜持”
- 『“prejudice (偏見)”を持つことが必要』  
“pre” + “judge” = “prejudice”  
事前に自分で仮説を立て、判断し、行動すること

私は、「3つのS」が非常に重要だと考えています。複雑に考えず、できるだけ単純に物事を考えること (simple)、物事を進めるにはスピーディーにやること (speed)、そして自信を持つこと (self confidence) です。これも社内で絶えず言っていることですが、「賢い頭」ではなく「強い頭」になってほしいと思います。多少いろいろなことを言われても、じっと我慢し考えることができる、そのような「強い頭」が非常に重要です。そして、もう一つ重要なことは、いろいろなことを考えるにあたっては「偏見」を持ってほしいということです。他人の発言に対して「それは偏見に過ぎない」などとすぐにいう人もいますが、人の考えはまず「偏見」からスタートしており、各個人の考えはすべて「偏見」であるともいえます。英語では“prejudice”ですが、この語源は「pre + judge」です。つまり判断するための前提として物事を考えるのが“prejudice”ということです。「偏見」こそ物事を考える原点ですから、ぜひ「偏見」を持ってほしいと思います。スマートフォンに頼るようでは「偏見」はいつまでも出てきません。自分の頭で考えて初めて「偏見」が生まれてくるのです。

「偏見」を持つにあたって重要なのは「仮説 (hypothesis)」を立てることです。「これをしたらどうなるだろう」と考えを巡らせることが大切です。「仮説 (hypothesis)」と「偏見 (prejudice)」、この二つをぜひ持っていただきたいです。まず仮説を立て、その仮説を発展させて偏見を持つ。偏見がいろいろなことを生み出す原点になっていきます。偏見を持たない人間は結局デジタル人間になって、考える力がなくなってきます。偏見を持つことは何もおかしいことではありません。

< 学生の皆さんに贈る言葉 >

『五感をはたらかせること』

五感をはたらかせることにより、胆力を強いものにしていく。  
“強い頭”を作るためには、五感をフルにはたらかせる必要がある。

『Cogito, ergo sum』（我思う、故に我あり）

自分はいったい何であるのか。

『Intelligent of ignorance』（無知の知）

自分はいったい何を知っているのか。  
常に「自分が知らないことがあるということを自分が知る」ことが重要。

『Time and tide wait for no man』

時間は刻々と過ぎていくものであり、人を待ってくれることはない。  
人はすぐに老いてしまうものであるから、時間を無駄にせず努力すること。

デカルトの「Cogito, ergo sum」（我思う、故に我あり）も有名な言葉です。英語では“I think, therefore I am.”ですが、この言葉もぜひ覚えておいていただきたいです。自分でしっかりと考えること、それがないことには、自分とは何かがわからなくなります。



最後の「五省」は、しっかりと覚えておいていただきたいです。

- 至誠に悖るなかりしか（真心に反することはなかったか）
- 言行に恥ずるなかりしか（言葉と行いに恥ずべきところはなかったか）
- 気力に欠くるなかりしか（精神力に欠いてはいなかったか）
- 努力に憾みなかりしか（十分に努力をしたか）
- 不精に亘るなかりしか（全力で最後まで取り組んだか）

「五省」は、広島県の江田島にあった海軍兵学校に掲げてあった言葉ですが、敗戦後にアメリカ軍がこの言葉を見つけ、日本人はこんな言葉で勉強していたのか、と感心したそうです。

神戸大学は長い歴史を持つ大学ですが、皆さんには、自分達がさらに神戸大学を発展させていくのだ、という意気込みを持っていただきたい。そのためには、AIやIoTに頼り切るのではなく、偏見でもいい、仮説でもいい、まずは自分で考える、ということをお願いしたいと思います。